

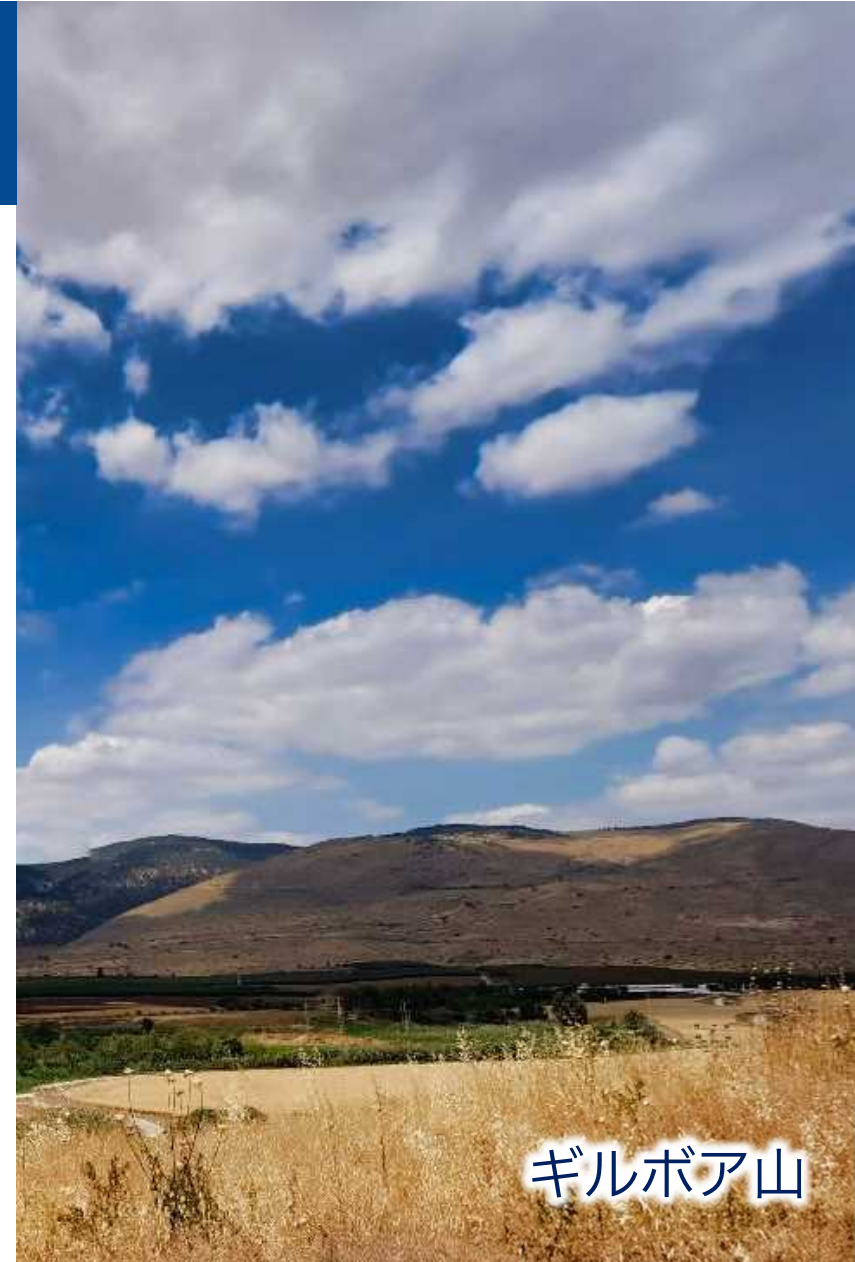
8
ダビデ
聖徒伝 92

「誰が王に なりうるか」

サムエル記一31章～二1章 サウルの最期 ダビデの哀歌

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. サウルの最期 31章
- II. ダビデへの悲報 1章1～16節
- III. ダビデによるサウルの哀歌
1章17～27節
- IV. まとめと適用
罪と裁き 信仰と救い





【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

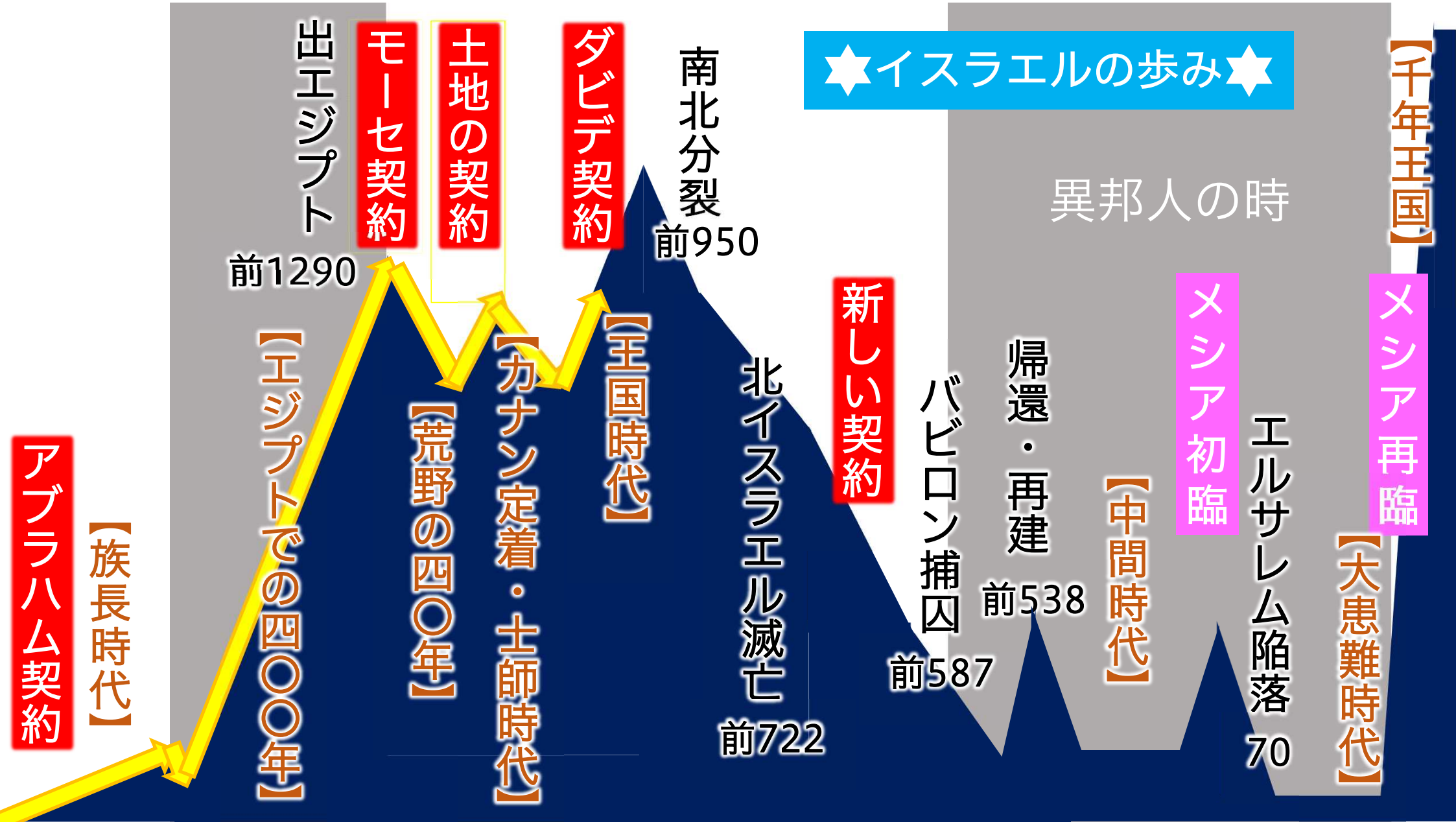
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

未来

★イスラエルの歩み★



異邦人の時

【千年王国】

メシア再臨

【大患難時代】

エルサレム陥落 70

メシア初臨

【中間時代】

帰還・再建 前538

バビロン捕囚 前587

新しい契約

北イスラエル滅亡 前722

南北分裂 前950

【王国時代】

ダビデ契約

【カナン定着・士師時代】

土地の契約

【荒野の四〇年】

モーセ契約

【エジプトでの四〇〇年】

出エジプト 前1290

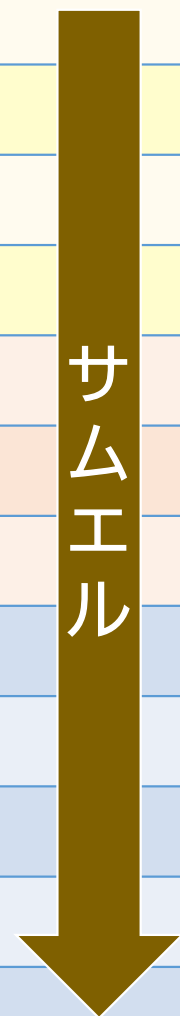
【族長時代】

アブラハム契約

サムエル記 第一

士師時代
王政時代

サムエル	1 : 1~2 : 11	サムエルの誕生
	2 : 12~3:21	サムエルの召命
	4:1~7:17	奪われた契約の箱
	8 : 1~9:27	後継者不在 王を求める民
サウル	10:11~11:15	油注ぎ
	12:1~25	士師サムエルの民への告別
	13:1~15:35	王が重ねた神への背き
ダビデ	16:1~13	油注ぎ
	16:14~23	王宮での奉仕
	17:1~58	ゴリヤテとの戦い
	18:1~30	偉大な戦績・王の娘との結婚
	19:1~26:25	荒野の逃亡の日々
	27:1~30:31	ペリシテ人の地で
	31:1~13	サウルの死



サムエル記 第二

ダビデ王の治世の正と負

ユダの王	1 : 1~27	サウルとヨナタンの死
	2 : 1~4:12	ユダの王に即位
イスラエルの王	5:1~25	エルサレム遷都 全イスラエルの王に
	6:1~25	神の箱が都に上る
	7:1~29	ダビデ契約 の締結
	8:1~9:11	ダビデの治世 勢力の拡大・義と憐れみ
失墜する 王の権威	10:1~12:31	アンモンとの戦い ダビデの過ちと悔い改め
	13:1~14:33	悪化する家族問題
	15:1~18:32	アブサロムの謀反 ダビデの都落ち
	19:1~20:26	ダビデの帰還
追記	21:1~22	サウルの氏族の末路・戦士ダビデの引退
	22:1~51	ダビデの歌
	23:1~39	ダビデの遺言 勇士たちの記録
	24:1~25	人口調査 ダビデの罪と罰

【ダビデとサウルの足取り】 | サムエル記11～28章

■ 初代の王サウルは主に背き、神の目に、王権すら剥奪。神は、御心に叶ったダビデに油を注いだ。

■ 勇士として名を挙げたダビデにサウルは嫉妬し、殺意を抱く。以来、ダビデの逃亡生活が始まった。

■ ダビデは、サウルを討つ機会を二度もあえて見逃した。しかしサウルは変わらず、両者の道は交わらなかった。

■ イスラエルとペリシテの大戦が迫る中、ペリシテ軍と行動を共にしていたダビデは、戦地を目前に返された。一方のサウルは、最後の戦いに臨もうとしていた。



サウルとダビデの足取り

サウル

ダビデ

ギルボアに陣取る 28:4,29:1

霊媒に伺う 28:5~25

サウルの最後の夜

ペリシテとの戦い 31:1~13

ペリシテからの召集 28:1~3

ペリシテの先陣 28:4,29:1~2

引き帰されるダビデ 29:3~11

略奪された拠点の町 30:1~5

家族の奪還・凱旋 30:6~31

I. サウル王の最期

I サムエル記31章



ペリシテ軍・シュネム

イスラエル軍・ギルボア山



メギドとイズレエル平原





ペリシテ軍

シェネム

エン・ドル

メギド

イズレエル平原

ギルボア山

イスラエル軍

ベテ・シャン

【ギルボアでの戦い】 | サムエル31:1~2

さて、ペリシテ人はイスラエルと戦った。イスラエルの人々はペリシテ人の前から逃げ、ギルボア山で刺されて倒れた。

ペリシテ人はサウルとその息子たちに追い迫って、サウルの息子ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュアを打ち殺した。

攻撃はサウルに集中し、射手たちが彼を狙い撃ちにしたので、彼は射手たちのゆえにひどい傷を負った。

- 王を守ったヨナタンら息子たちが討たれ、逃げる王に一斉に矢が射かけられた。



【サウルの最期】 | サムエル31:4

サウルは道具持ちに言った。「おまえの剣を抜いて、私を刺し殺してくれ。さもないと、あの無割礼の者たちがやって来て、私を刺し殺し、私をなぶりものにするだろう。」

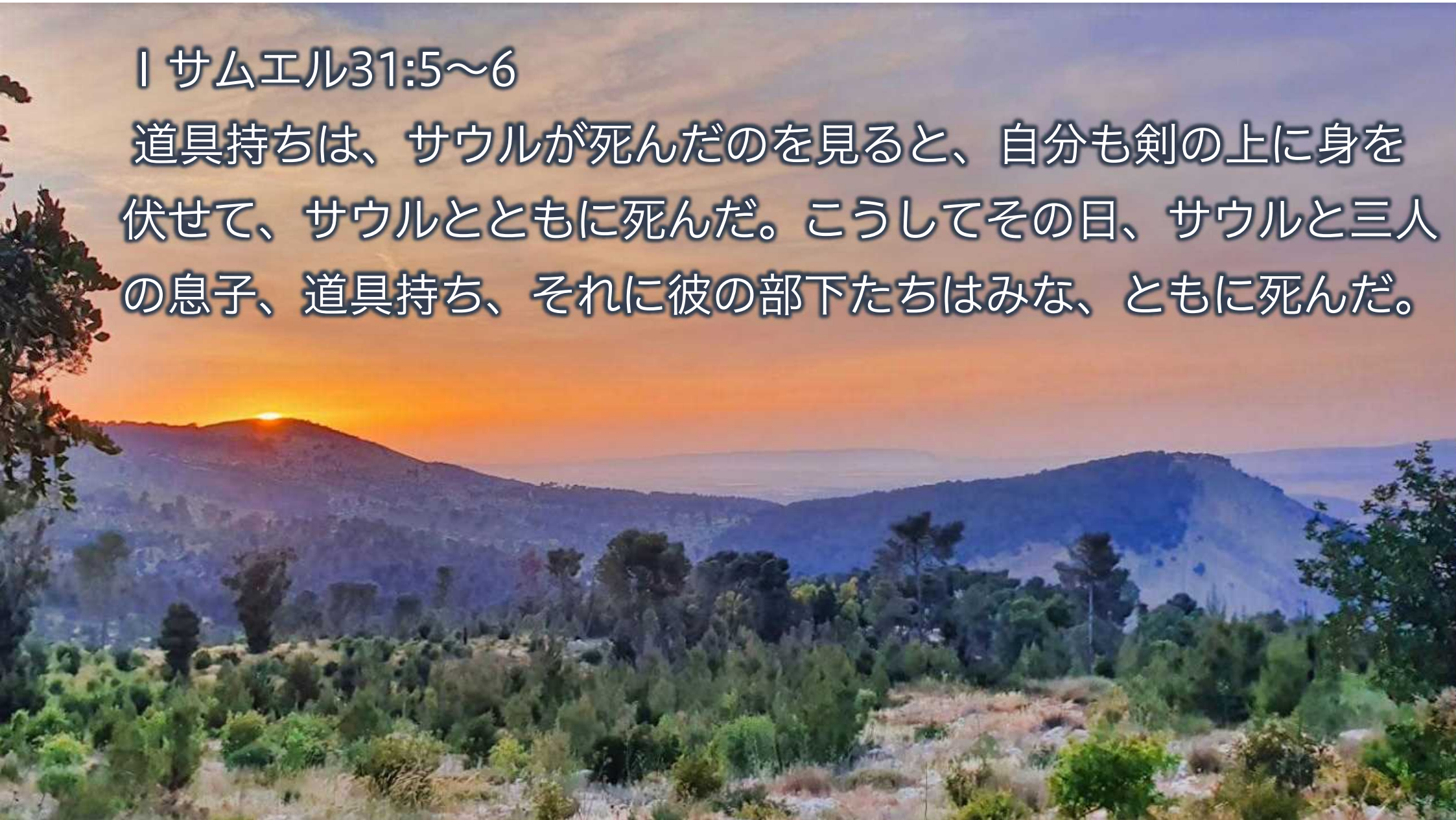
しかし、道具持ちは非常に恐れて、とうていその気になれなかった。それでサウルは剣を取り、その上に倒れ込んだ。

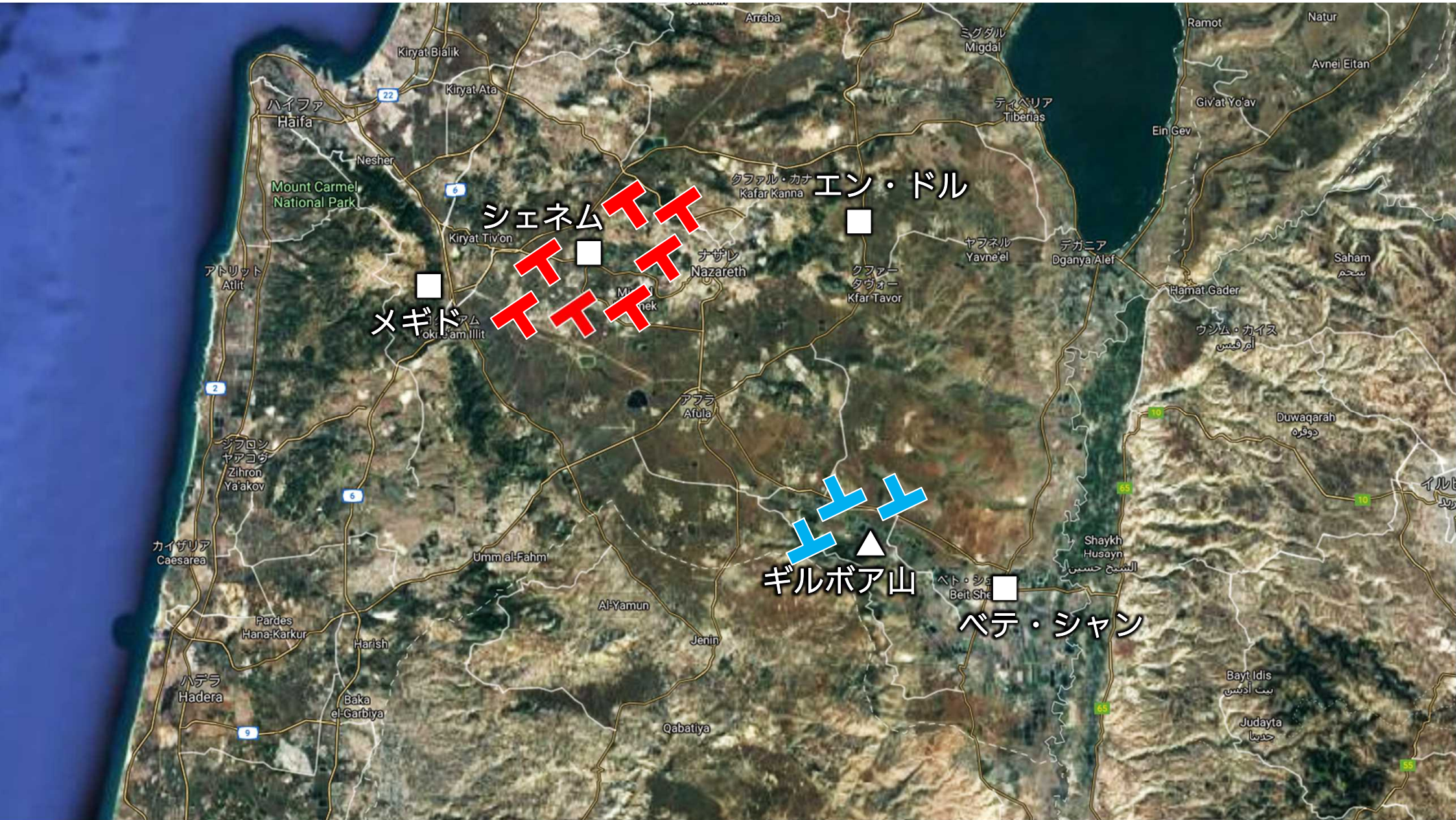
- イスラエルの**王の名誉**を重んじたサウル。
油注がれた王を刺すのを**恐れた**道具持ち。



Ⅰ サムエル31:5~6

道具持ちは、サウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に身を伏せて、サウルとともに死んだ。こうしてその日、サウルと三人の息子、道具持ち、それに彼の部下たちはみな、ともに死んだ。





ハイファ
Haifa

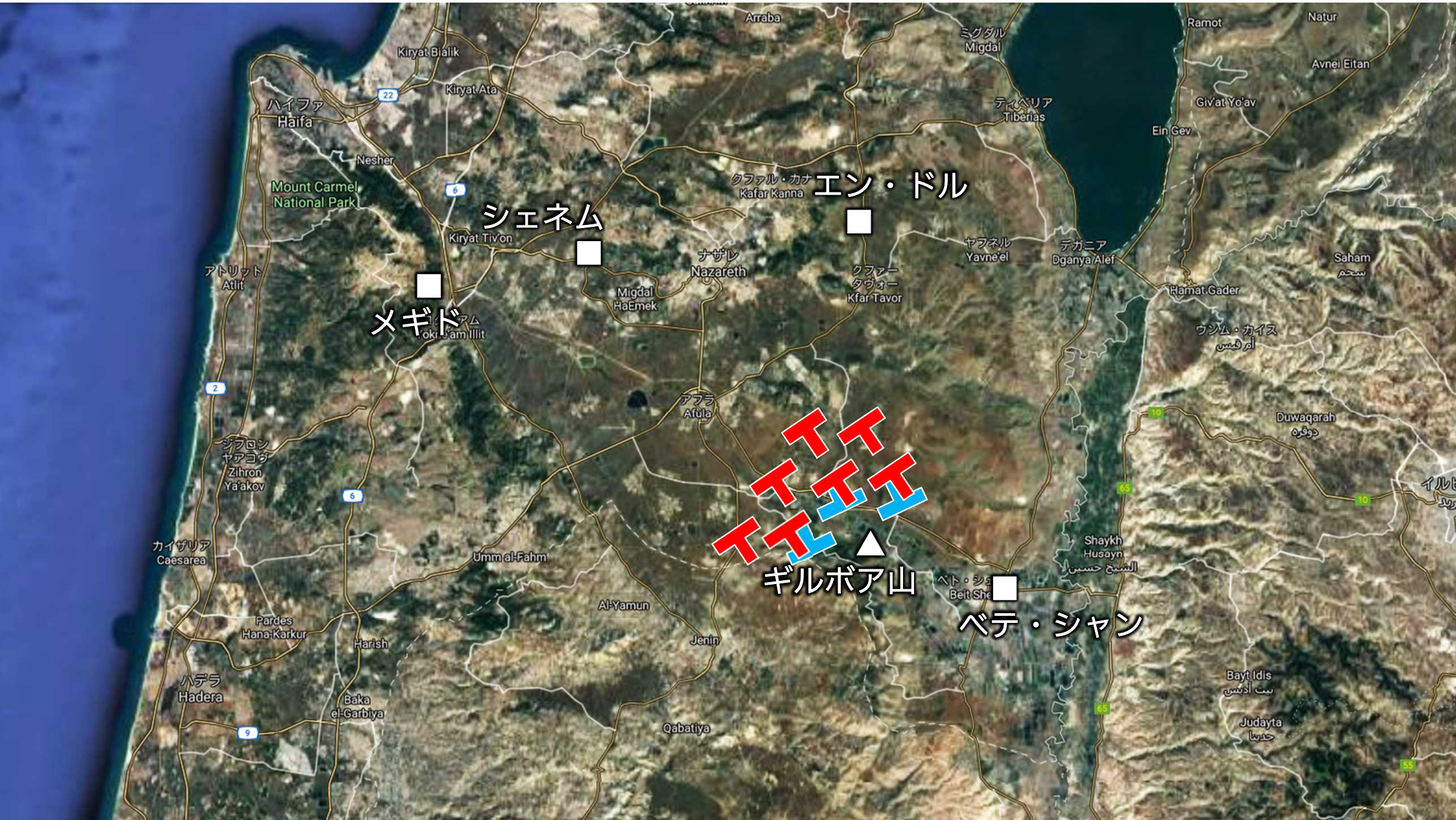
シェネム
Shechem

エン・ドル
En-Dor

メギド
Megiddo

ギルボア山
Mount Gilboa

ベテ・シャン
Beit Shean



1 Samuel 31:7

谷の向こう側とヨルダン川の向こう側にいたイスラエルの人々は、イスラエルの兵士たちが逃げ、サウルとその息子たちが死んだのを見て、町々を捨てて逃げた。それで、ペリシテ人がやって来て、そこに住んだ。

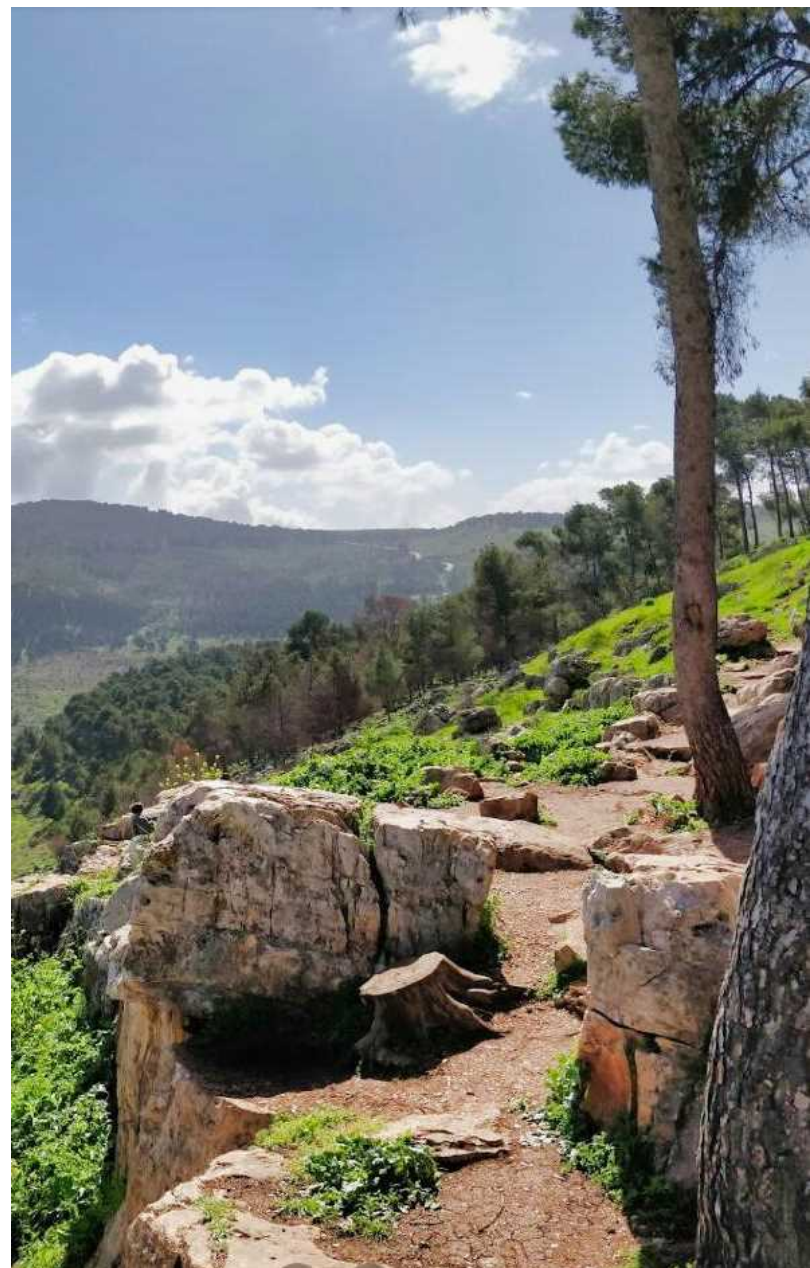


【戦いの跡に】 | サムエル31:8

翌日*、ペリシテ人が、刺し殺された者たちからはぎ取ろうとしてやって来たとき、サウルと三人の息子たちがギルボア山で倒れているのを見つけた。

***ペリシテの攻撃の激しさがよくわかる。**

➡イスラエル軍を壊滅させたペリシテは、イズレエル平原と周囲の地域までも瞬く間に攻め落とし、一日中、攻撃の手を休めることがなかった。



【凌辱された遺体】 | サムエル31:9~10

彼らはサウルの首を切り、彼の武具をはぎ取った。そして、ペリシテ人の地の隅々にまで人を送り、彼らの偶像の宮と民とに告げ知らせた。彼らはサウルの武具をアシュタロテの神殿に奉納し*、彼の死体は**ベテ・シャン***の城壁にさらした。

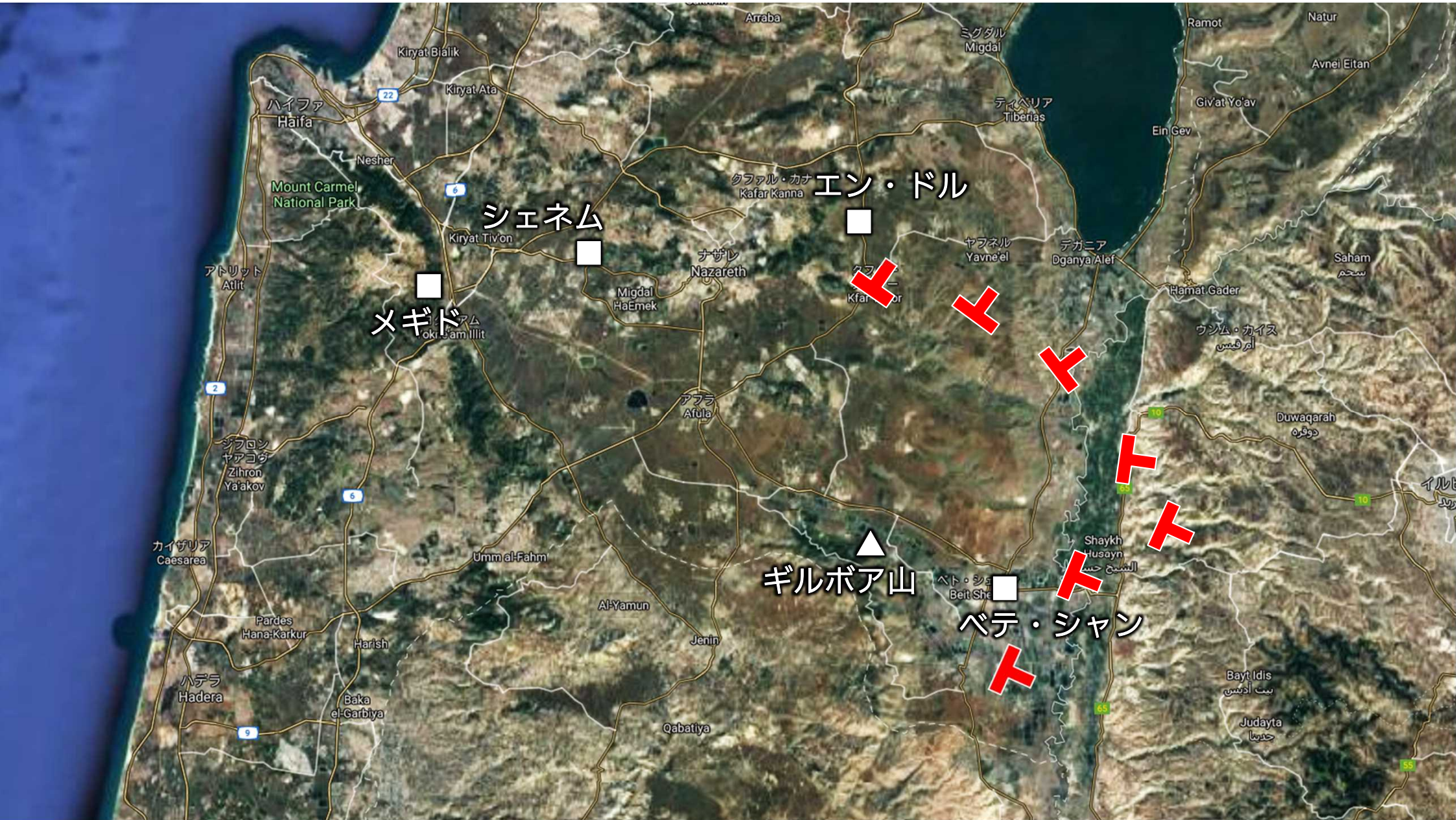
*イスラエルの神に勝ったという認識。

*イズレエル平原の東端、交易路の町。

➡イエス時代には、ローマ式の町があった。



ベテ・シャンの遺跡



ハイファ
Haifa

アトリット
Atlit

カイザリア
Caesarea

ハデラ
Hadera

Kiryat Blalik

Kiryat Ata

シェネム
Shechem

Kiryat Tivon

メギド
Megiddo

ジフロン
ヤアコフ
Zihron
Ya'akov

パルデス
ハナ・カルク
Pardes
Hana-Karkur

ハリシ
Harish

バカ
エル・ガルビヤ
Baka
el-Garbiya

Arraba

ミグダル
Migdal

ティベリア
Tiberias

クファール・カナ
Kafar Kanna

エン・ドル
En-Dor

ナザレ
Nazareth

Migdal
HaEmek

アフラ
Afula

Umm al-Fahm

Al-Yamun

Jenin

Qabatiya

ヤブネル
Yavne'el

デガニア
Dganya/Alef

Ein Gev

Ramat Gader

ウシム・カイス
Ushim
Ka'is

ドワカラ
Duwaqarah

ギルボア山
Mount Gilboa

ベト・シヤン
Beit She'an

ベテ・シヤン
Bet She'an

Shaykh
Husayn

バヤト
Idis

ジュダヤ
Judayta

【ヤベシュへの凶報】 | サムエル31:11

ヤベシュ・ギルアデ*の住民は、ペリシテ人がサウルに行った仕打ち*を聞いた。

*サウル王の初陣で敵から救った町。(11章)

➡ サウルのベニヤミン族の女たちのルーツ

*王の死も悲しみだが、イスラエルの王の遺体の陵辱も我慢のならないこと。

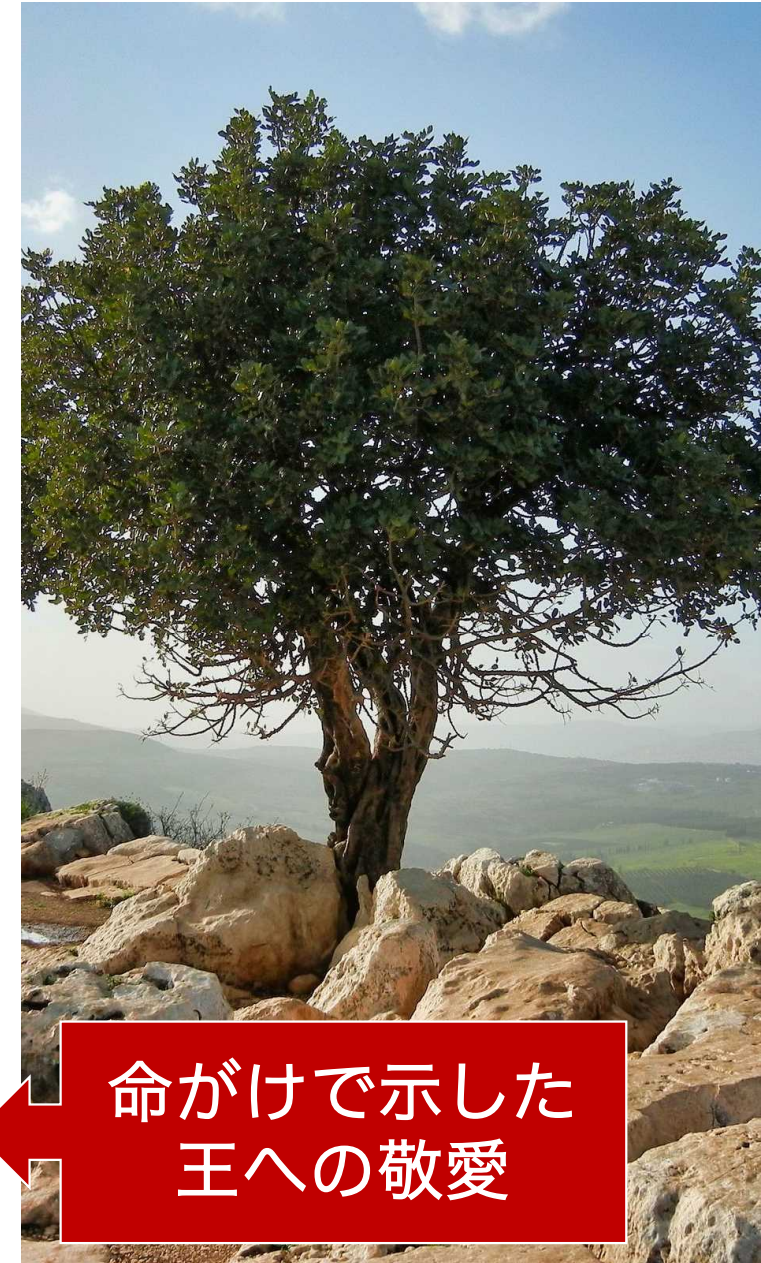


【ベテ・シャンの勇士】 | サムエル31:12

そこで勇士たちはみな立ち上がり、夜通し歩いて行き*、サウルの死体と息子たちの死体をベテ・シャンの城壁から取り下ろし、ヤベシュに帰って来て、そこでそれらを焼いた*。彼らはその骨を取って、ヤベシュにあるタマリスクの木の下に葬り、七日間、断食した。

*25kmの道のりを敵の支配圏のただ中へ。

*火葬は異例。通常は遺体を墓に1年程安置、骨を拾って骨壺に納める。遺体へのこれ以上の凌辱を防ごうとしたのだろう。



命がけで示した
王への敬愛



II. **ダビデへの悲報** サムエル記二 1章1～16節

ギルボア山から臨むイスラエル平原

【ツィクラグのダビデ】 Ⅱサムエル1:1

サウルが死んだとき、ダビデはアマレク人を打ち破って帰って来ていた。その後ダビデは二日間、ツィクラグにとどまっていた。

■ アマレクを打ち破り、家族を取り戻して、拠点のツィクラグに帰還していたダビデ。



【招かざる使者】 II サムエル1:2～3

すると三日目に、見よ、一人の男がサウルのいた陣営からやって来た。衣は裂け、頭には土をかぶっていた。彼はダビデのところに来ると、地にひれ伏して礼をした。

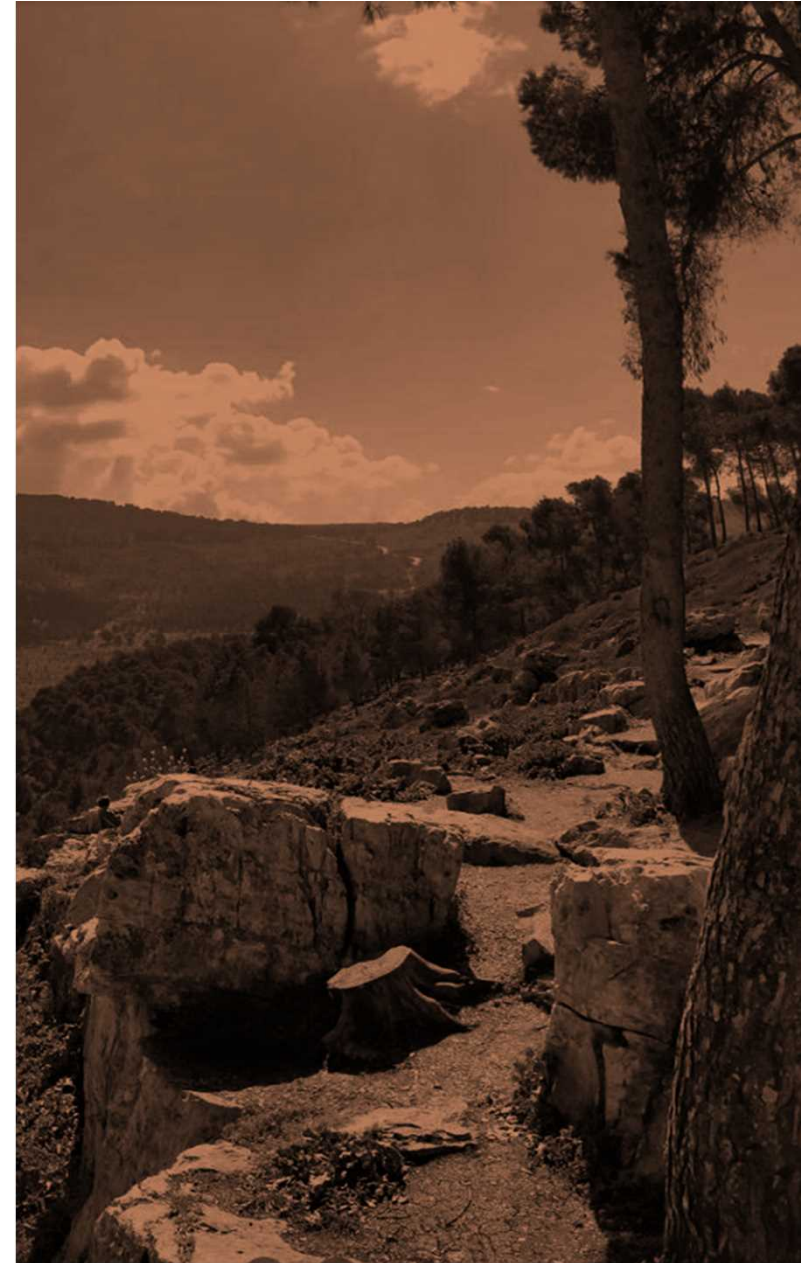
ダビデは言った。「どこから来たのか。」
彼は言った。「イスラエルの陣営から逃れて来ました。」



【悲報】 Ⅱサムエル1:4～5

ダビデは彼に言った。「状況はどうか。話してくれ。」彼は言った。「兵たちは戦場から逃げ、しかも兵たちの多くの者が倒れて死にました。それに、サウルも、その子ヨナタンも死にました。」

ダビデは、報告をもたらしたその若い者に言った。「サウルとその子ヨナタンが死んだことを、どのようにして知ったのか。」



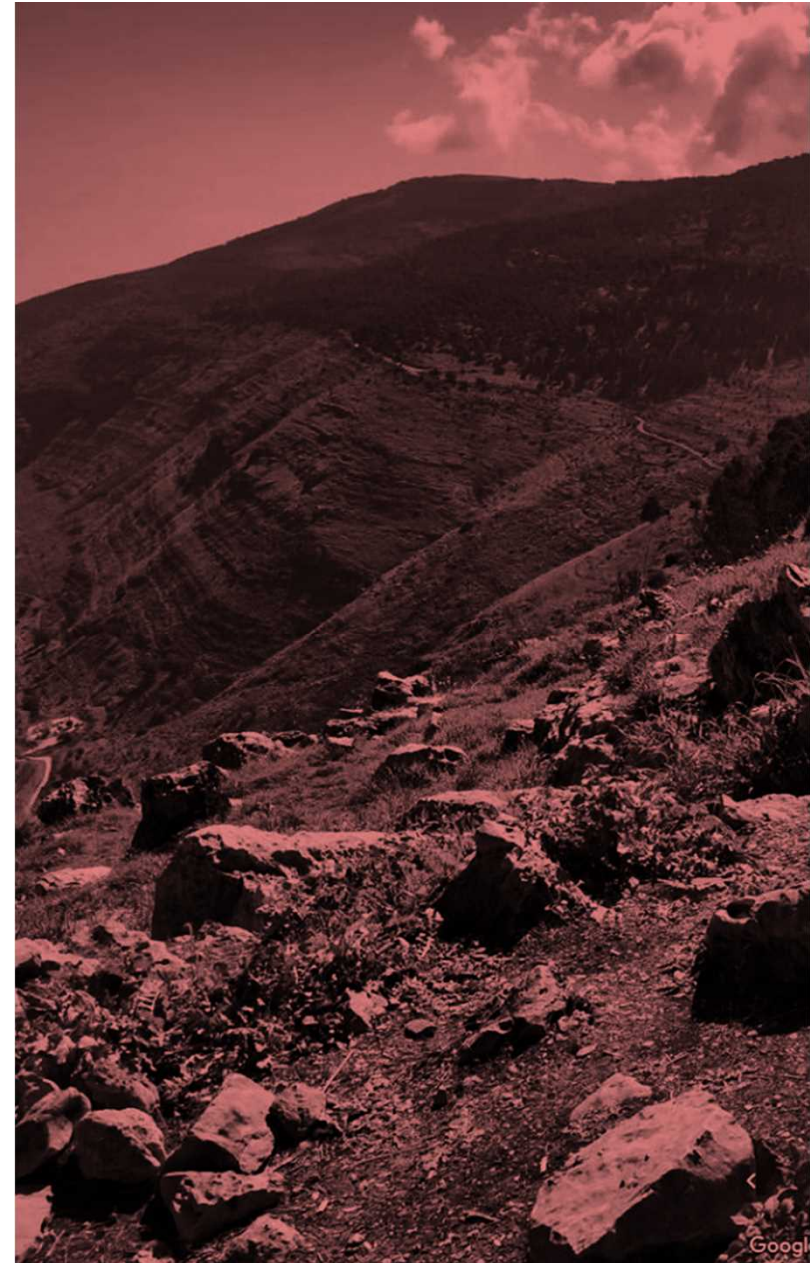
【男の報告】 Ⅱ サムエル1:6～8

報告をもたらしたその若い者は言った。

「私は、たまたまギルボア山にいましたが、見ると、サウルは自分の槍にもたれ、戦車と騎兵が押し迫っていました。

サウルが振り返って、私を見て呼びました。私が『はい』と答えると、私に『おまえはだれだ』と言いましたので、『私はアマレク人です』と答えますと、

■ 詳細な証言。意図を持って間近で目撃?!

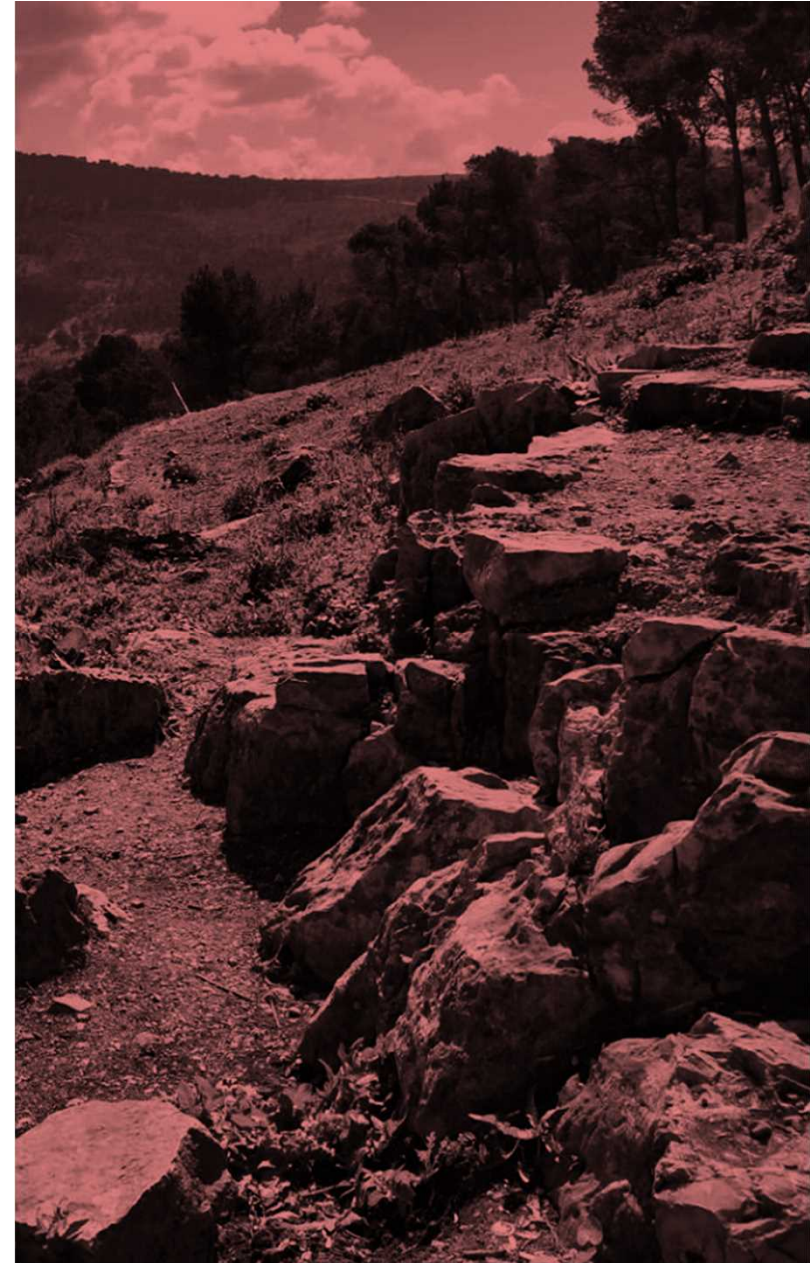


【男の報告】 Ⅱ サムエル1:9～10

『さあ、近寄って、私を殺してくれ。激しいけいれんが起きているが、息はまだ十分あるから』と言いました。

私は近寄って、あの方を殺しました。もう倒れて生き延びることができないと分かったからです。私は、頭にあった**王冠**と、腕に付いていた**腕輪**を取って、ここに、あなた様のところに持って参りました。」

*ペリシテがサウルの遺体の発見が遅れた理由の一つは**王冠**がなかったからか？



【悼むダビデ】 Ⅱサムエル1:11～12

ダビデは自分の衣をつかんで引き裂いた*。
ともにいた家来たちもみな、そのようにした。

彼らは、サウルのため、その子ヨナタンの
ため、また【主】の民のため、イスラエルの
家のために悼み悲しんで泣き、夕方まで断食
した*。サウルらが剣に倒れたからである。

*激しい嘆きと悲しみの表現。

*これ以上ない深い哀悼を示したダビデ。



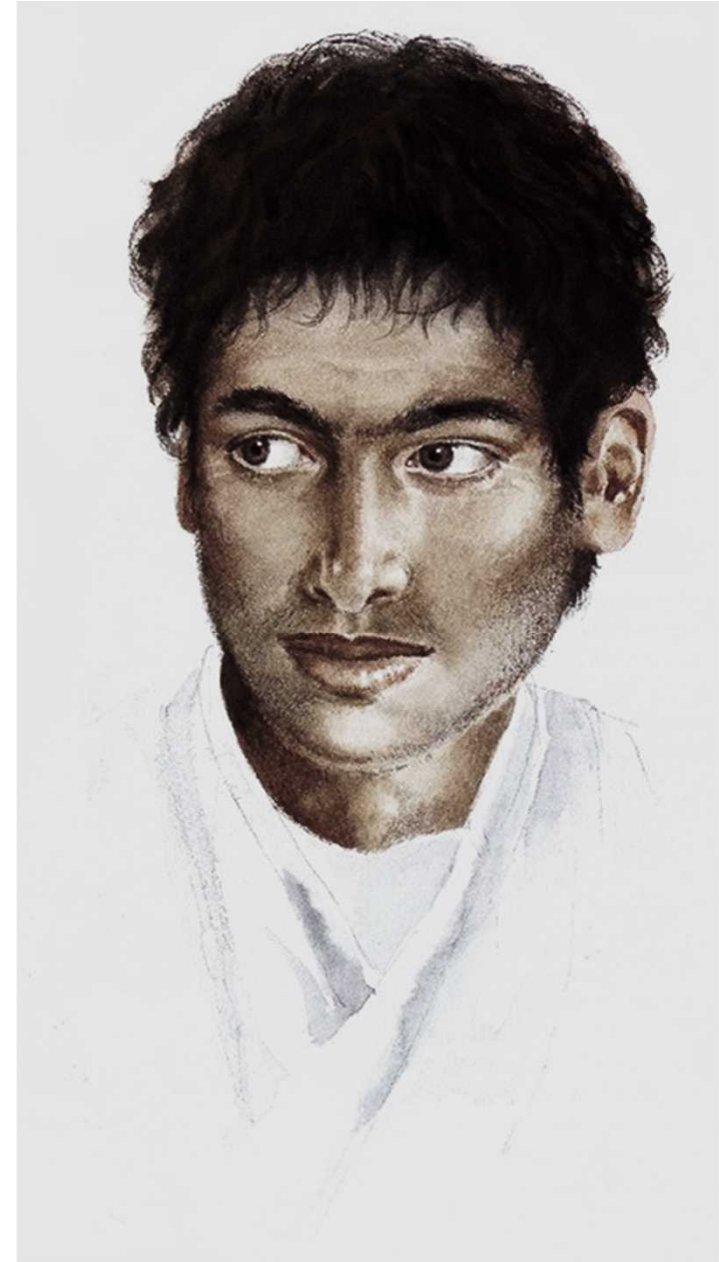
【ダビデの詰問】 II サムエル1:13~14

ダビデは自分に報告したその若い者に言った。
「おまえはどこの者か。」彼は言った。
「私はアマレク人*で、寄留者の子です。」

ダビデは彼に言った。「【主】に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れなかった*とは、どうしたことか。」

*出エジプト後、イスラエルの落伍者を襲い、
主がサウロに聖絶を命じた略奪の民。

*根本に、神への恐れがない。



【若者の血】 Ⅱサムエル1:15～16

ダビデは家来の一人を呼んで言った。
「これに討ちかかれ。」彼がその若い者を
討ったので、若い者は死んだ。

ダビデは若い者に言った。「おまえの血は、
おまえの頭上に降りかかれ。おまえ自身の
口で、『私は【主】に油注がれた方を殺し
た』と証言したのだから。」

- 発言に相応する厳罰を下したダビデ。
王への不敬。神への背き。厳罰に値する。
- ダビデも、サウル王の尊厳を保った。





Ⅲ. ダビデによるサウルの哀歌 サムエル記二 1章17～27節

ギルボア山の夕日

【】 Ⅱサムエル1:17

ダビデは、サウルのため、その息子ヨナタンのために、次の**哀歌***を歌った。

*哀悼の歌。葬送歌。挽歌。

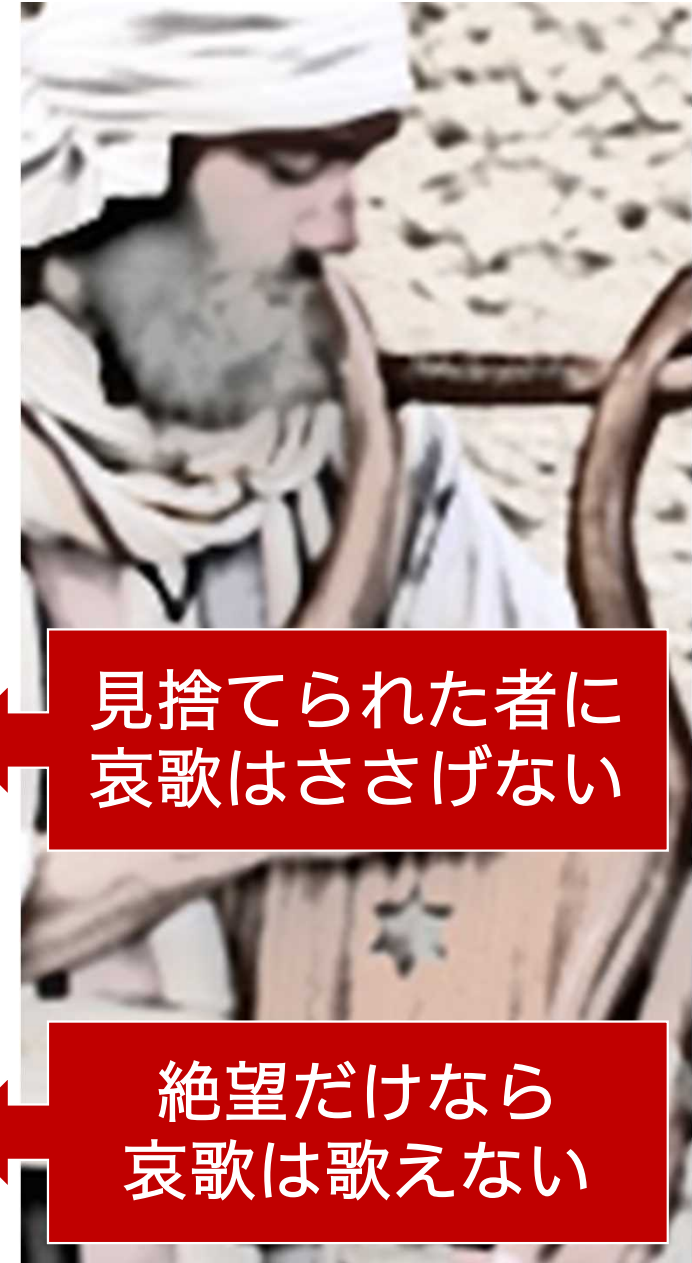
■個人的に哀歌がささげられているのは、戦死した南王国の善王**ヨシヤ**だけ。

→エレミヤが歌った(Ⅱ歴35:25)

■他は、**イスラエル**への裁きの預言として。

(エレミヤ7:29,エゼキエル2:10,アモス5:1他)

→主題は、神の裁きへの嘆き、悔い改めの促し。



見捨てられた者に
哀歌はささげない

絶望だけなら
哀歌は歌えない

【弓の歌】 II サムエル1:18

これはユダの子らに**弓**を教えるためのもので、
『ヤシャルの書*』にまさしく記されている。

***弓**の習い始めに、この哀歌を覚えた。

➡今なお「**弓**」として歌い継がれている。

イスラエルの毎年4月の“戦没者記念日”
戦没者2万人の名が17時間かけて放送。

子どもたちは、この哀歌を学び暗唱する。

*今は失われた歌集。



【哀歌・弓の歌】 II サムエル1:19～27

- ダビデの悲しみを率直に歌ったもの。
- 神が油注いだ王への最大の敬意をこめて、初代の王としての確かな功績のみに焦点。
- 感じ取るべきは、ダビデの王への敬愛。兄弟の契りを結んだヨナタンへの深い愛。
- 背後にあるのは、揺るぎない神への信頼。憐れみに満ちたイスラエルの約束の神、主。



サウルの切手・イスラエル

【哀歌・用語解説】 II サムエル1:19～27

■三連からなる歌。

“ああ、勇士たちは倒れた”が、各連の始まり。

①19～24節,②25～26節,③27節

*ガテ、アシュケロン…都市国家連合である
ペリシテの主要な町々。

*盾に油も塗られない …油を塗って手入れ?!
油注がれた王の凄絶な最後への嘆きか。

*紅の衣 …高価な染料を用いた艶やかな服。



戦没者記念日ポスター

1 サムエル1:19 「イスラエルよ、君主はおまえの高き所で殺された。
ああ、勇士たちは倒れた。

1:20 これをガテに告げるな。アシュケロンの通りに告げ知らせるな。
ペリシテ人の娘らを喜ばせないために。無割礼の者の娘らが喜び躍
ることがないために。

1:21 ギルボアの山よ。高原の野よ。おまえたちの上に、露は降りる
な。雨も降るな。そこでは勇士たちの盾が汚され、サウルの盾に油
も塗られなかったからだ。

1:22 殺された者の血から、勇士たちの脂から、ヨナタンの弓は退く
ことがなく、サウルの剣も、空しく帰ることがなかった。

1:23 サウルもヨナタンも、愛される、立派な人だった。生きているときも死ぬときも、二人は離れることはなく、鷲よりも速く、雄獅子よりも強かった。

1:24 イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。サウルは、紅の衣を華やかにおまへたちに着せ、おまへたちの装いに金の飾りをつけてくれた。

1:25 ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。ヨナタンはおまへの高き所で殺された。

1:26 あなたのために私はいたく悲しむ。私の兄弟ヨナタンよ。あなたは私を大いに喜び楽しませ、あなたの愛は、私にとって女の愛にもまさって、すばらしかった。

1:27 ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器は失せた。」



IV. まとめと適用 罪と裁き・信仰と救い

ギルボア山から臨むイスラエル平原

【サウルが救われていると考える7つの理由】

- ① **神が**サウルを王に**選んだ**。
- ② サウル王の誕生は、**イスラエルの罪の結果**。(イスラエルの責任)
- ③ サウルは、主を信頼し、**主の召命に応えた**。
- ④ 神がサウルに聖霊を降らせ、取り去り、また、悪霊を送られた。
- ⑤ サムエルが、“**私と一緒にいるだろう**”と告げた。
- ⑥ 遺体は敬意を持って葬られ、**ダビデが哀歌**をささげた。
→見捨てられた者に哀歌はささげられない。(ヨシヤ、イスラエル)
- ⑦ 後の時代も哀歌は歌い継がれ、子孫たちも**サウルと名づけられた**。

神がサウルを選び、サウルは神を信頼して召命に応えた。

【救いの原則から、サウルの死を考えよう】

- 死を悟り、剣で自害したサウル。➡自殺者は救われていない？
- 律法に自殺について**明記はない**。➡十戒の“殺すなかれ”の適用。
- **人はただ、信仰によって義とされる**。➡**救いの原則は不変**。
主イエスの血潮で贖えない罪はない。今は福音を信じて救われる。
- もちろん、自殺が肯定できる訳がない。
しかし、何があろうとも信じた者から救いが失われることはない。
例話) 一人の牧師の葬儀にて。

【サウルが救われていないなら？】

- 神に背き、信仰者を虐げ、偶像(霊媒)に頼んだサウル。
サウルが犯した過ちを、しかし、ダビデ、ソロモンも犯した。
- 荷物の影に隠れていた臆病者サウル。しかし、彼は召しに応えた。
打ち砕かれ、主に信頼しなければ、王の召命になど応えられない。
- 神が選んだ**サウル**が見捨てられてしまうのなら？
神が選んだ**イスラエル**が見捨てられてしまうのなら？
→ 一体、誰が救われうるだろうか？

【もう一人のサウルの宣言】

■ 名誉ある勇士の一族、ベニヤミン。その末裔の一人が、使徒パウロ。パウロ(ギリシャ名)のヘブル名が、**サウロ**、つまり**サウル**。

ローマ11:1 それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。**決してそんなことはありません。**この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です。

11:11 それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。**決してそんなことはありません。**かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

■ 世の終わりの裁きを経て、イスラエルは民族的回心に導かれる。

【誰が王になりうるか？ 聖書が示す唯一の答え】

- イスラエルの初めての王として立てられたサウル。
王として手本にする人もなく、王の孤独を知る者もいなかった。
- 神の計画の中心に置かれたイスラエルには、常に激しい敵の攻撃が。
歴史に刻まれた、ユダヤ人の経験してきた幾多の惨劇。
その霊的戦いの重圧がのしかかるのが、イスラエルの王。
そんな重圧に、生身の人間の、一体誰が耐えうるだろうか？
- ダビデは繰り返し、憐れみの主を讃え、真実の王を求めている。
→ 真実に王となり得る人物は、**メシア**をおいて他にない。

【私たちへの救いの原則】

- 救いの道は唯一。主イエスの**福音**を信じること。
神の確かな約束のゆえ、信じた者から**救いが失われることはない**。
- なお罪を犯す私たち、日々悔い改めて、方向修正をしていこう。
主に告白するならば、**ゆるされない罪はない**。
- 世にあって、**蒔いた種の刈り取り**はある。試練は免れない。
信仰の道を歩むほど、思い知らされる私自身の罪がある。
しかし、成し遂げられた**主の贖い**、**憐れみ**の御業が私を支える。
信仰者の試練の道は、罪ゆるされた者だからこそ、歩むことができる。

真実の王を待ち望みつつ、主への信頼の上に今を歩んでいこう

- 「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
- ①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
 - ②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
 - ③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

私の罪のすべてはゆるされました。主イエスの血潮(ちしお)のゆえに、この身は、きよくされました。

世にあって今なお、さいなめる罪があり、迷(まよ)う私がいいます。どうか、はかりしれない 主の救(すく)いの真実(しんじつ)を、この身(み)に、心に、きざんでください。

よろこんで、ここから、つかわされるものとしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」